

# KCELS

**Newsletter No.9**  
**MARCH 1994**

## KCELS第18回大会が終わって

別府 恵子

英文学科の重要な年中行事であるKCELSの1993年度大会は、昨秋11月14日に開催された。KCELSの大会開催にあたっては、特別講演の講師に三年周期で、英文学、米文学、英語学、それぞれの学会で活躍されている研究者を招聘している。もちろん、外国の学者を招くことも過去何度かあったと思う。今回は英語学が担当の年にあたり、東京大学名誉教授の国広哲弥氏をお迎えして、「英語表現の諸相」と題した興味深い講演を、参加した学生たちとともに拝聴することが出来た。

KCELS大会での講演のほかにも、英文学科では機会あるごとに、学外から著名な研究者を迎えて「特別講演」なるものを企画しているが、学生たちの積極的参加という点では、いま一つ盛り上がらないのが現状である。しかし、国広哲弥教授の特別講演には、非常に多くの学生たちが参加して、講師の話に熱心に耳を傾けていた。まずは、本大会準備委員の先生がたと一緒に喜びたいと思う。

さて例年、特別講演の後は、発表者や特別講師を囲んでの懇親会をもって大会は終わるが、この懇親会も大会の核をなす大切な会合だろう。というのも、多くの学会の懇親会同様、その席上で交わされる意見や情報、name droppingなるゴシップもまた、楽しいものであるからだ。国広教授は、多くの辞書の編纂者としてもその名の知られた学者。語彙の用例採用にまつわる裏話や、先生ご自慢の用例などを披露された。そのひとつを紹介すると、“Who is more carnal than a recent virgin?”にみられる“recent”の用法。学生の皆さん、名訳を考えてみませんか？

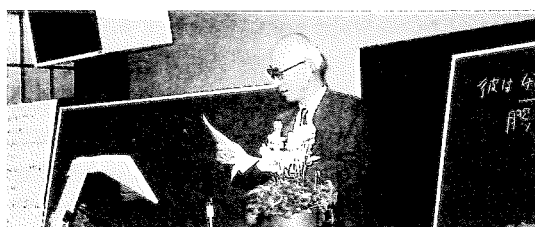
### ■特別講演(要旨)

#### 英語表現の諸相

東京大学名誉教授 国 広 哲 弥

##### 1. 重層表現 (stratification)

(1) He belched his way out of the restaurant.



(2) He made his way out of the restaurant.

(3) 彼はげっぷをしながらレストランから出て行った。

英語には(1)のような表現型があり、かなり生産的である。これは単に単語が1列に並んだものにとらえるべきではなく、基本形(2)の'made'の上に'belched'が重ねられていて、意味も両方の意味が重なっていると見るべきものである。その1つの証拠として、日本語に直すと(3)のようになり、重ねられた意味が並列されて表われてくる。このような表現構造上の差が出てくるのは、英語の屈折語性、日本語の膠着語性のゆえであると考えられる。類似の現象は英語の「名詞由来動詞」(denominal verb) (例、'bottle'「瓶」→「瓶に詰める」)、伝達動詞 (例、'smile'「微笑する」→「微笑しながら言う」) にも見られる。

Jackendoff (1992) も同じ現象を扱っているが、ここには「重層」の概念はなく、表面的に意味の記述をするに留まる皮相な研究である。Jackendoff はまたこの型に用いられる動詞は継続的な意味のものに限られると言うが、(4)はそうではなく、1回限りの出来事を指している。

(4) The traffic light ambered its way to red. —Sidney Sheldon, *The Naked Face* (交通信号は黄から赤に変わった)

重層表現はさらに 'rise to one's feet,' 'come to a stop' などにも見られる。

##### 2. 知覚述語 (perception predicate)

外界を言語で描写する場合、英語では 'I find (feel, see, hear, etc.)' で始めることが多く、これを「知覚述語」と呼ぶことにするが、対応する日本語表現では知覚述語を省くことが多い。

(5) Turn to the right, and you'll find a post office.

(6) 角を右に曲がると、郵便局があります。

日本語表現の方でも、因果関係を表わす接続助詞「と」の動きからすると、(6)はそれに合わない用法になっている。知覚述語に入れ換えて「角を右に曲がると、郵便局が見えます」とすると辻つまが合ってくる。この表現構造の差は、日本文学とその英訳を比べてみるとさらに確認することができる。

### 3. 痕跡表現 (trace expression)

人間は、物の位置関係や形を言語で表現するとき、実際には動きはないのに、「あたかも動いた結果として今見る位置にある、あるいは形をなしている」と認知しているかのように表現する。これを「痕跡表現」と呼ぶ。

(7) *Winding roads thread their way through slopes...* (曲がりくねった道が斜面を縫って登っている)

(8) The road *extends* from Kobe to Kyoto. (この道は神戸から京都まで伸びている)

この場合、動きの主体は比喩的に道路と考えられているのであり、松本曜 (未刊) が言うような、道路の上を移動する人や車なのではない。また Jackendoff (1983) は例えば 'extend' という動詞が持つ普通の変形を表わす意味と、道路などの動きのない姿を表わす意味との関係をどのように解釈したらよいか分からない、と述べているが、この現象は物の形を動きの痕跡と比喩的にとらえる人間の認知活動を導入しない限り理解することはできないであろう。重層表現の場合も合わせ考えれば、Jackendoff の研究は、道具立てが一見ものものしいにもかかわらず、表面の裏に目を向けることのない浅いものであることが明らかとなる。Langacker (1987) の見解も、Talmy (1989) の 'fictive motion' を表わすとする考えも多かれ少なかれ表面しか見ることでできない底の浅いものである。我々日本人は、英語に関する研究は何でもかんでも英米の学者の研究の方が優れているとする盲目的な態度を改める必要があるだろう。

### 参考文献

- Jackendoff, Ray (1983), *Semantics and Cognition*, M.I.T. Press.
- \_\_\_\_\_(1992), "Babe Ruth Homered His Way into the Hearts of America." *Syntax and Semantics*, 26.
- Langacker, R.W. (1987), *Foundations of Cognitive Grammar*, I, Stanford.
- 松本 曜 (未刊), 'Abstract Motion and English and Japanese Verbs.'
- Talmy, L. (1989), 'Fictive motion in language and perception.' A paper presented at the Conference on

Meaning and Perception, May, 1989.

## ■研究発表(要旨)

### THREE READINGS OF PSEUDO-CLEFTS IN ENGLISH AND JAPANESE

吉村京子

The aim of the paper is to account for some behavioral differences in the two types of pseudo-clefts (PCs) in Japanese, i.e. wa-PCs and ga-PCs (1a), from the interpretative point of view.

- (1)a. Toshitaka-ga soko-de mitsuketa no wa/ga koinu da  
b. What Toshitaka found there was a puppy.

First of all, the PC construction can be divided into two parts semantically, i.e. presupposition and focus. Considering the functional difference between the particles wa and ga, the wa in PCs seems to be Kuno's (1973) thematic wa and the ga in PCs the exhaustive-listing ga. Therefore, while the thematic wa can function to mark the presupposition part, the ga in PCs can mark the constituent before it as having some kind of presupposition, but in a little different way: there are a variety of things under discussion (hence the shared information), but X-ga serves to make X newly prominent.

According to Higgins (1976), English PCs have three distinct interpretations, i.e. predicational, specificational, and identificational. The paper claims that in Japanese, ga-PCs allow an identificational reading and a predicational reading, but wa-PCs show a specificational reading and a predicational reading.

Moreover, based on this interpretative distinction, the following differences in the two types can be accounted for: i) while wa-PCs exhibit the so-called 'connectedness' effect, ga-PCs do not (2); ii) as the focus phrase, wa-PCs can take NP, PP, and AP, but ga-PCs can only take NP and AP (3); iii) certain "quantificational" expressions cannot be the focus in ga-PCs (4); iv) ga-PCs are out in some question-answer pair (5); and v) the matrix copula cannot be negated in ga PCs (6).

- (2)Tatsuya<sub>1</sub> -ga soko-de mita no wa/\*ga [jibun<sub>1</sub> -no shashin] da  
(3)Tatsuya-ga koinu-o mitsuketa no wa/\*ga [pp kooen-no naka de] da  
(4)Tatsuya-ga mitsuketa no wa/\*ga koinu dake da

(5)Tatsuya-ga nani-o kooen-de mitsuketa no?

--Kare-ga mitsuketa no wa/\*ga koinu da

(6)Tatsuya-ga mitsuketa no wa/\*ga koinu de wa nai

That the subject is referential under the identificational reading explains (ii) and (iii). The reason for (iv) and (v) is that ga-PCs are talking about the identification of some particular thing by giving a name to the reference of the subject. Finally, wa-PCs show the "connectedness" effect because with a specificational reading the focus phrase determines the value of the "gap" in that it specifies a particular member of the domain delimited by the subject, but not with an identificational reading.

## 『アントニーとクレオパトラ』 —ローマとエジプトを超えて—

徳久久美子

『アントニーとクレオパトラ』において、ローマとエジプトという価値観の対立が見られるが、アントニーとクレオパトラの愛が、その二つの価値観を超越したヴィジョンを築いている。この作品において、ローマは、何よりも名誉を重んじ、男性中心の政治の世界である。ローマと対極にあるエジプトは、自然、生命、快楽を象徴する世界である。二人の関係は、最初、快楽中心の肉体的(material)なものであったのが、やがては精神的(spiritual)なものに変貌する。つまり、その愛は、ローマの尊重する名誉も、エジプトの意味する快楽も含有し、それ以上の存在となる。

また、シェイクスピアは、喜劇、悲劇、史劇、すべての要素をこの作品に取り入れ、従来のステレオタイプに挑戦し、新しい英雄像、ヒロイン像、愛の形を創造している。つまり、今までの作品を超えた境地に至っている。四大悲劇の直後に書かれてはいるが、四大悲劇のように善が悪と戦うという構図ではない。それまでの高潔なヒーロー、ヒロインとは異なり、アントニーとクレオパトラは、人間の愚かさ、弱点を多分に内含している。そのために、この作品は、道徳的価値基準が曖昧だと批評されてはいるが、確固たるモラルが存在している。弱点だらけの人間を描きながら、気高さを示すというこの作品は、後期ロマンス劇の『許し』というテーマと相通ずるものがある。人間の悪、過ちをただ罰するのではなく、それを許すという境地である。劇の最初で、アントニーは、自分達の愛が、新天地を創造すると言うように、この作品もこれまでの作品を越えた新天地と言えよう。

すべてを超越し、独自の世界を築いたアントニーとクレオパトラの愛の世界について詳細に論じることが発表

の主旨である。

## キャンパスニュース

### ◎英文学科新任教員紹介

Gregory McElwain 専任講師 (M.A. in English Literature, University of New Mexico; M.A. in Telecommunications, Indiana University)

1993年4月から2年間、語学教師として就任されました。Oral English, Current English, Rhetoric等を担当され、英語教育に専念されています。

### ◎英文学科客員教授紹介

1994年度前期には、Wynne-Davies教授(英国University of Keele, ルネッサンス文学)、後期にはVictor Strandberg教授(Duke University, アメリカ文学)をお迎えすることになっています。

### ◎Kathryn Ann Bufkin氏

2年間の任期を終えられ、1993年3月米国South Carolinaに帰国されました。

## 会 員 消 息

- 朝日千尺氏 1993年8月より近畿大学教授(文芸学部)に就任。
- A. Banerjee氏(本学教授) カナダ、オタワで開催されたThe Fifth International D.H. Lawrence Conference (1993年6月)にて研究発表。
- B. L. Cooney氏(本学専任講師) 一年間の英国留学を終え、1993年10月帰任。アムステルダムで開催されたInternational Association of Applied Linguistics Conference (1993年8月)にて研究発表。
- 三宅晶子氏(本学教授) イタリア、ラパロで開催されたEzra Pound International Conference in Europe (1993年7月)にて研究発表。
- 難波江和英氏(本学助教授) 甲南大学で開催された日本ヴァージニア・ウルフ学会(1993年5月)にてシンポジウムのパネリストとして研究発表。
- 新野 緑氏(神戸市外国語大学助教授) 1994年4月よりUniversity of Oxfordに一年間留学の予定。

### 訃報

英文学科長も勤められ、アメリカ文学、英語教育の指導を通して英文学科の発展に力を尽くされました神戸女学院大学名誉教授、中村順一先生が1994年1月15日、ご永眠になりました。享年85才。慎んで哀悼の意を表します。

### 会員による出版紹介

- 朝日千尺氏  
『D.H. ロレンスとオーストラリア』 1993年 8月  
研究社
- 別府恵子氏  
*Melville and Melville Studies in Japan*  
(ed. Kenzaburo Ohashi) 1993年 Greenwood  
Press
- 風呂本淳子氏  
『ルーシー』(ジャメイカ・キンケイド著・翻訳)  
1993年11月 学芸書林
- 本城智子氏・上 紀子氏  
『ランダムハウス英和大辞典』(小西友七・安井稔、  
国広哲弥・堀内克明編集) 1993年11月 小学館
- 伊藤栄子氏  
『はじめにことばありき—言語と文学』 小野捷  
博士退官記念論文集(梅津義宣他編)  
1993年11月 英潮社
- 金城盛紀氏  
『シェイクスピアのビジネス講座』(J. シャフリッ  
ツ著・共訳) 1993年 4月 日本経済新聞社
- 新野 緑氏  
『ディケンズ小事典』(松村昌家編) 1994年 1月  
研究社

### 編集後記

• KCELS年次大会は、念願の国広哲弥先生の御講演が実現し熱心な学生の参加を得て大変充実した会を持ってました。その報告をかねてのNewsletter No. 9をお届けする運びとなりました。Newsletterでは会員の皆様の御活躍の紹介記事も出来る限り掲載し、より充実したものにしていきたいと願っています。研究成果、出版、消息など英文学科事務所まで御一報下さい。

• 大学冬の時代を迎え、大学改革、特にカリキュラム改革をめぐる論議が盛んになっています。わが英文学科も新しい時代に対応したカリキュラムの開発の必要性を頭におき、カリキュラムの見直し、改善と取り組んでおります。カリキュラムの多様化、弾力化と学生の自主性を目指すと共にその美名の下に基礎教育が軽視されることのないように論議を重ねています。英文学科の質的充実を図るために会員の皆様からの幅広い、貴重な御意見と一層の御支援をお願い申し上げます。



### KCELS Newsletter 編集委員

(第18回KCELS大会準備委員)

- 別府恵子
- 原田園子
- 林 和仁
- 上 紀子
- 渡部 充
- (ABC順)

### KCELS Newsletter No. 9

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 52-0955

振替口座番号 神戸 0-9323